7 月 2 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　11：　4 – 18

「神は異邦人をも」

「イエスは言われた。『清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。』」(ルカによる福音書 17:17-18)

イエスがエルサレムへ上る途上、ガリラヤとサマリアの間を通られたとき、重い皮膚病を患っている 10 人を癒されました。9 人は喜び勇んで祭司のところへ向かい、社会的地位を回復しようとしました。一方、一人のサマリア人はイエスの下に戻ってきて、神を賛美しました。これは、その時にイエスが言われた言葉です。

ご存じの通り、イスラエルとサマリアの間には歴史的遺恨がありました。それでも、このサマリア人は戻ってきたのです。どちらが真に神に従っているかは一目瞭然です。だからイエスは、彼の信仰を認められたのでした(「イエスはその人に言われた。『立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』」ルカによる福音書 17:19)。

神が招かれるのは、元々神を信じている者だけではありません。

異邦人であるモアブの女性、ルツを神は招かれました。夫も二人の子も失い、ベツレヘムへ戻ろうとするしゅうとめナオミからルツは離れようとしません。それどころか、「あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。」(ルツ記 1:16)と、神への信仰を告白するのです。この思いに打たれたナオミは、ルツと共に帰郷することにしました(「同行の決意が固いのを見て、ナオミはルツを説き伏せることをやめた。」ルツ記 1:18)。

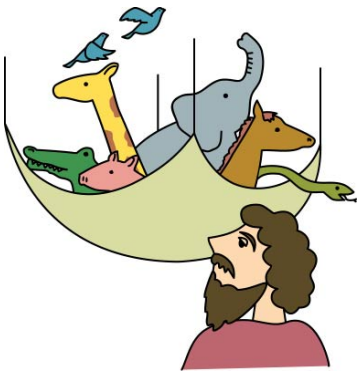
このような歴史がありながら、イエスの弟子たちの中には、信仰を自分たちだけのものにしようとする者があったと聖書は伝えています(「ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、『あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした』と言った。」使徒言行録 11:2-3)。

だから、ペトロは彼らに弁明するのです。これは神の御意思なのだ、と(「すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない』と、再び天から声が返って来ました。」使徒言行録 11:9)。「“霊”がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました」(使徒言行録 11:12)。「こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか」(使徒言行録 11:17)。

聖霊は「御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを」(ローマの信徒への手紙 8:28)皆、知っているはずではないか、と。事実、ベツレヘムでボアズと再婚したルツには、オベドという子が与えられました。オベドの子がエッサイ、そしてエッサイの子がダビデです(ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。」マタイによる福音書 1:5-6)。

「神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」(使徒言行録 11:18)と驚くだけで終わってはなりません。神は造られた全ての者に働きかけ、一人ひとりを用いられます。神は「異邦人をも」招いて救いの計画を実現されるのです。平和を実現されるのです。

もちろん、私たちもその計画の働き手として招かれています。「全ての人を弟子にする」ことは、私たちには難しいかもしれません。それでも、せめて今、同じ神を信じながら争いに身を投じている者のために祈りたいのです。



「地の果てまで／すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り／国々の民が御前にひれ伏しますように。」(詩編 22:28)

自らの欲望のために神を利用しようとするのではなく、今こそ、神に従う時だと伝えたいのです。

「異邦人をも」召し出して、平和を実現される神と共に、豊かで、争いのない世界を共につくっていきたいのです。